

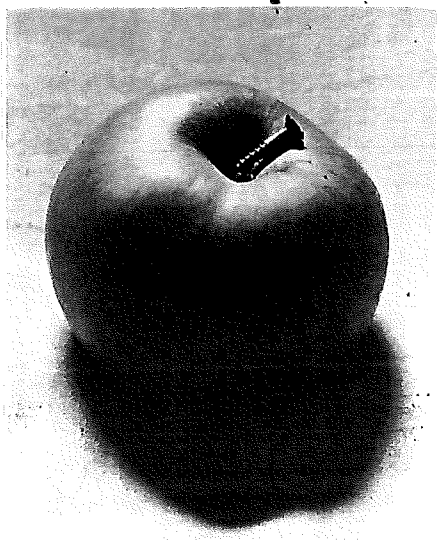
「デペイズマン」の美学

たとえばリンゴとねじ釘ということです。あまりにも唐突でよくわからないと思いますので、作品を見ていただきます。マン・レイの「無題」の写真です(49)。

どうです。たしかにリンゴとねじ釘ですね。両方ともわれわれの日常でよく目にする物体です。これらを別々に撮影して並べたとしたら、なんともない二つのモノの写真といえるでしょう。ところがこの二つが一緒になって、ちょうどリンゴの中心のところにねじ釘が置かれると、ちよつと不思議な感覚が生じてきます。金属と果実の触感の違いが、どこかエロティックな気分を呼びおこしたり、このリンゴが本物ではなく精密なメカニズムを備えた機械じかけに見えてきたり、ともかく日常の世界とは次元がずれた別な世界に誘いこまれるような感覚です。リンゴの上にねじ釘を置く、ただそれだけのことで世界の見方が変わってくる。

このように二つの互いに関係のないものが結びつけられる時に生ずる異様な衝撃を「デペイズマン(dépaysement)」といいます。シュルレアリスムの用語で「転位」という意味ですね。よく例にあげられるのはフランスの詩人、ロートレアモンの詩の中にある「解剖台の上でのミシンとこうもり傘との偶然の出会いの美しさ」という言葉ですが、たしかに二つのなんでもないモノが、ちよつと位置を

49—マン・レイ「無題」(一九三二)



変えて一緒になるだけで、思ってもみなかった新しい「美しさ」が生まれてきます。マン・レイのよいうなシュルレアリストは、この「デペイズマン」の美学に魅せられ、さまざまな実験を試みました。彼は一九三三年に実際に「解剖台の上でのミシンとこうもり傘との偶然の出会い」をそのまま再現した写真を撮影しているからです。

それにしても、このアメリカ・フィラデルフィアの生まれで、一九二二年以後はパリで活動するアーティストほど、モノ(オブジェ)の奇妙な小宇宙にとり憑かれた男はほかにいなかったかもしれませぬ。彼は絵も立体作品も映画も制作するといった具合に、写真家という枠組におさまるような人物ではないのですが、常に世界をオブジェ化するという欲望にとらえられていました。彼の作品のほとんどすべてに、「デペイズマン」の美学の応用を見ることができます。

次に、95ページの第三室の扉に戻って作品(39)をご覧ください。また彼が写真に本格的に取り組むはじめたばかりの時期のもので「外套掛け」という題名がついているものです。裸体の女性が、簡単な

切り抜きの絵とスタンドのようなものと組み合わせられて「外套掛け」に変身させられているのですが、彼のポートレイトやヌードには、このようなオブジェ化された身体がよく登場します。彼の恋人だった人気モデル、キキの裸の背中を弦楽器に見立てた、有名な「アングルのヴァイオリン」(一九二四)もそうですね。ただ誤解のないように書いておけば、オブジェ化はマン・レイの所有欲のあらわれというより、モデルの女性との一種のゲームだったように思えます。身体をモノに見立てることで、この作品のようにユーモラスでエロティックな関係の回路が生まれてくる。そのことをマン・レイは心から楽しんでいたのでしょう。

フレデリック・ソマーの世界

フレデリック・ソマーも強烈な「モノ狂い」の写真家です。イタリアで生まれ、ブラジルで教育を受け、一九三一年にアメリカに移住して画家・写真家になるという変わった経歴の持ち主ですが、その作品はモノに対する神秘的なこだわり、魔術的な思考に貫かれています。明らかにシュルレアリスムの影響を取り入れた、人形、金属片、雑誌のイラストの一部などをコラージュした作品もありますが、実物を実物のまま、ギリギリのシャープネスで定着した作品に、彼の独自性がよくあらわれていますように思います。

彼は「私にとって写真とは、いかにしてイメージをネガや印画紙などの感光面に定着させるのかというプロセスである」と述べたことがあります。彼の興味をそそるのはそこに写っているモノの形態や意味ではなく、この「感光面」上のイメージの広がりの方なのです。たしかにソマーの写真を見てみると、印画紙そのものが物質であることにあらためて気づかされます。つまりそこにあるのは物質化したイメージであり、同時にイメージ化した物質です。モノが写真のイメージに「転位」した時、それは不思議な手ざわりを備えた第二の物質としての輝きを発しはじめます。

たとえば次の作品、一九三〇年代から四〇年代にかけて制作された「鶏の解剖」シリーズの中の一枚です(51)。思わず目をそむける方もいるのではないのでしょうか。お断わりしておけば、ソマーはいつてもこのようなグロテスクなイメージだけを追い求めていたわけではなく、優雅なヌードやアリゾナの砂漠の眩暈がするほどに緻密な風景写真も撮影しています。モノの質感や形態を、できる限りシャープに「感光面」上の物質化されたイメージに置きかえようとした結果、このような被写体にまでたどりついたというでしょう。たしかにグロテスクではありますが、ふと笑いを誘われるような奇妙なユーモア感覚も漂っているような気がします。

ソマーに限らず、写真というメディアの最大の逆説の一つは、モノや風景を精確に、緻密に撮影すればするほど、そこにどこか幻想的な雰囲気あらわれてしまうことです。イメージの細部は実物とそっくりそのまま同じなのですが、全体としてみればどことなく魔術的な「本物より本物らしい偽物」といった感覚が生じてしまう。それはおそらく、写真のシャープネスがわれわれの肉眼の視覚とは、異質な原理によってつくられているからでしょう。ちよつと周囲を見渡してみればすぐにわかることです。われわれの眼はけっこういいかげんなもので、ピントの合う範囲も限られていますし、ぼんやりとしか対象を見ていない。写真の精密な描写は、いわば「神の眼」のようなもので、一種の驚きと恐怖の感情を引き起こすことさえあります。「モノ狂い」の写真家たちの多くは、その精密描写の強烈な魅惑にとりつかれてしまっているといえるでしょう。